［メタウォーター］

車載式水質浄化装置を納入

マラウイなどアフリカ3カ国に

メタウォーター（株）は9月、セラミック膜を使った車載式浄水装置のアフリカ展開を開始した。日本政府の無償資金協力（環境プログラム無償）を通じて、まずはマラウイ、ケニア、トーゴの3カ国に装置を順次提供する。災害対策向けに同社の車載式装置が採用されるのは初めてだという。今後は水の確保が難しい地域など他地域への展開も想定している。

装置は、濁りの強い水や、河川水など濁度の変動が激しい水でも安定的に浄化できる独自のセラミック膜を活用している。

セラミック膜は、通常の膜を用いた水質浄化装置で使われている高分子膜などに比べて丈夫で、長く使用しても損傷が少ない点が特徴だ。膜の寿命は15年以上、使用後もセラミック原料としてリサイクルできるという。

浄化したい水を凝縮剤を使って凝縮し、供給ポンプを用いて直径0.1マイクロメートルの穴の開いた膜を通過させることで浄化する仕組み。水に含まれるクリプトスポリジウムをはじめとする原虫類や、大腸菌などの細菌類を除去できる。

この浄化装置を発電機とともにトラックに搭載。そのまま移動できるため、浄水場の設置が難しい地域への設置や災害時などの緊急対策として活用が可能なことから、納入先からも高く評価された。

今回納入が決まったマラウイ、トーゴ、ケニアの3カ国に対しては、それぞれ今年末から来年2月までかけて順次、現地に装置を納入していく予定だ。マラウイには1台当たり1日の浄水能力が75㎥の装置3台を12月ごろに納入する計画。また、トーゴには同50㎥の装置3台を来年1月ごろに、ケニアには同50㎥の装置2台を来年2月ごろにそれぞれ納入する。

いずれも浄化能力が最大540NTU（ホルマジンを標準液に用いた測定方法で1リットル当たり540ミリグラム）までの高濁度水を処理できる。

最近では気候変動の影響もあり、世界各地で洪水などの自然災害が頻発している。日本政府はこうした影響を受けやすい開発途上国に対して政府開発援助（ODA）などを通じて支援する姿勢を打ち出している。

今回、納入先に決まった3カ国も、急激な降雨などによって洪水などが発生している。その対応が急務で、災害時に安全な水をいかに確保するかが求められていた。3カ国は日本政府に対して被災地で使用できる浄水装置などの機材提供を要請。これを受け、日本政府は無償を通じて支援することを決めた。

同社は今後、アフリカに限らず、災害時の対策や安全な水の確保に悩む他の地域にも展開したい考えだ。

災害対策向けに初めて納入される車載式水質浄化装置

国際協力人事アラカルト

国際協力機構（JICA）

2012年9月1日付人事（カッコ内は前職）

●フランス事務所長：松下篤氏（アフリカ部次長（グループ担当））

●アフリカ部次長（グループ担当）：大竹智治氏（企画部参事役）